

# 戦争と西南学院とギャロット先生

片山 寛

## 1. 日米開戦の時期の西南学院

西南学院史資料室には、戦前から戦中にかけて発行された『西南学院新聞』が保存されている。これは当時の西南学院を知るための貴重な資料であるが、非常に残念なのは、その45号から49号（1941年3月以後、翌1942年4月以前）がごっそり欠けていることだ。それは、日米開戦（1941年12月）を挟んだちょうど1年間にあたる。この欠号の意味することについて臆断することは、差し控えねばならないが、当時の西南学院の人々が戦争をいかに受け止めたかを知るための第一級資料であったことは間違いない。

欠号直前の44号（1941年2月3日）には、「日米戦争は始まって居る」と題して、英米と戦うには大東亜経済圏の確立が必須であるという、読売新聞社東亜部長田中幸利の署名記事が掲載されている。「米がない、木炭がない、砂糖がない、卵がない——などの不平不満は何ごとぞといたい。……（為政者や当局者に）怠慢や錯誤があるならば、あくまで鞭撻糾弾すべきだが、そのまえに、自らそれらの不足欠乏に耐えうるだけの、時局に対する認識なり心構えなりが先ず要求されねばならない。むしろそうした正しい認識や、切実な心構えに徹底させるためには、ある場合、米、木炭その他の全面的徹底的窮乏の試練を国民に与えるがよいとさえ思う。それほど<sup>うかつ</sup>の迂闊さに日本はあるのだ。ほんとうの一億一心万民翼賛体制は、こうした迂闊さから生まれるものではない」。

欠乏に耐えることこそ国民の義務であり、それこそが戦時翼賛体制だというのである。このような議論が日本全国を蔽っていた時代であった。この同じ号には、長らく使用されてきた「S・W」を組み合わせた校章を、4月から<sup>2</sup>改めるとの予告記事も掲載されている。「S・W というのが決して悪いという事はない、それも確定したというわけではないから明言は出来ぬが、好い図案があればこの際改めたいと考えている」という、言い訳じみた「学院当局」の談話つきである。また高等学部の学友会や、

1 新かなづかひに修正。以下同様。

2 実際には新しい校章の決定に手間取り、1942年11月3日（明治節）からの使用となった。『西南学院七十年史』1986年、上巻481頁。

商学部の学術研究団体の商学会が解散されて、学院報国団<sup>3</sup>が結成されたとの記事も見える。

西南学院は明らかに追い詰められていた。この前年1940年9月には、福岡県学務当局から、中学部での聖書授業を正課から除くように通達があった。同月末には、姉妹校である小倉の西南女学院に対して、「愛国同志会」を名乗る団体によって西南女学院排撃運動が始まった。西南女学院は小倉市<sup>いとうづ</sup>到津の丘の上にあり、特に創立者J.H.ロウ<sup>4</sup>を記念するロウ講堂は市内各所から見える位置にあったことが、国粋主義者にとっては我慢のならないことだったのである。彼らはキリスト教を「英米猶太魔ノ野望覇道」に協力するもの<sup>5</sup>として、西南女学院の廃校を要求した<sup>5</sup>。福岡でも同じ1940年9月24日に、「興亜青年連盟」が、現在のソラリアの隣にあった「教育會館」で「キリスト教撲滅演説会」を開催し、これに抗議した西南学院生を含むキリスト者十数名が検束された。

西南学院に対する攻撃は、西南女学院や福岡女学校に比較すると穏やかだった。両校が廃校の瀬戸際にまで到った<sup>6</sup>のに比べて、西南学院についてはそのような直接的な要求はなかった。女性に対する差別意識が背後にあったのかもしれない。また両校と比べて、西南学院は軍事施設から離れていたということの他に、男子校でありスポーツが盛んでもあったので、自分たちは健児を送り出して戦時体制に直接的に協力していると主張できたことが大きい。『西南学院新聞』37号（1939年11月）には、学院出身の中国戦線での戦没者10名の追悼記念式が行なわれたことが記されている。ここで「尊き興亜の人柱」と呼ばれている10人は、1937年<sup>かに</sup>から39年にかけて戦死あるいは戦病死した人々である。「記念式は……先月二十日、畏くも聖上陛下の靖国神社御親拝の当日、遙拝式修了後学院ならびに同窓会共同主催の下に午前十時半より学院講堂に

---

3 それまでの学友会とは異なり、全教職員、全学生がこの「学院報国団」に組織化された。

4 John Hansford Rowe 1876-1929は、C.K. ドージャー1879-1933、G.W. ボールデン1881-1967、およびそれぞれの夫人（マーガレット、モード、マギー）と共に、1906年に同じ船で日本（長崎港）に来た6人の宣教師の最年長である。西南学院の初代理事長はロウであり、「西南学院」という名前は彼の命名による。西南学院（1916年創立）と西南女学院（1922年創立）は、この三組の宣教師たちの共同作業によって創設されたと言ってよい。

5 「愛国同志会」のこの運動は、1941年5月にロウ講堂が軍の施設（西日本防空司令部）に徴用され、1943年3月にはついに西南女学院の全施設を明け渡すように命ぜられるという結果につながった。『西南女学院七十年史』1994年、200頁以下参照。

6 福岡女学校（現在の福岡女学院）は、設立認可を取り消される寸前までいき、御真影の奉安殿を建て、宣教師社団から土地建物を福岡女学校に移転登記することによって、あやうく存続を許された。『福岡女学院百年史』1987年、176頁以下参照。

於いて遺族ならびに来賓多数参列を得、極めて<sup>そうごんり</sup>莊嚴裡に執行された」。戦没者についての記事はこれ以後毎号のように掲載される。いわば西南学院は戦死者をタテにして自らを守ったのであって、そこには好むと好まざるとに拘わらず、靖国神社思想と同じものが含まれていた。

もうひとつ特筆すべきは、西南学院が天皇・皇后の「御真影」を「奉戴」するように積極的に働きかけ、申請していったことである<sup>7</sup>。1937年には「御真影」を学校に迎えることに成功する。これは当初、院長室内の奉安所に安置されていたが、1943年には、それを収める宗教施設である「奉安殿」を敷地内に建設することを決定している。父兄や関係者から寄付を集めたのち、この奉安殿は1944年7月に完成し<sup>8</sup>、「御真影」がそこへうやうやしく収められた。生徒、学生は、奉安殿の前を通るときには、必ず一礼して通るようにと命じられた。

1940年10月には東京の青山学院で、「紀元二千六百年奉祝全国基督教信徒大会」がキリスト教の各派代表を集めて行われ、杉本勝次高等学部長、大村匡高等商業科長、河野博範宗教主任が参列した。1941年6月にはそれを受けて、プロテスタント教会各派が国家の指導の下に「日本基督教団」に統合された。キリスト教もまた戦争への国家総動員体制の中に組み込まれていったのである。

最初に述べた『西南学院新聞』の欠号(45-49号)の後、記事は戦時色に全面的に染まり、キリスト教にかかわるようなコラム記事も一時はほとんど姿を消す。その後56号(1943年3月)あたりから再び、ちらほらとキリスト教信仰に基づく随筆が掲載されるようになるのはなぜだろうか。おそらくそれは、戦時体制下でのキリスト教の協力姿勢がそれなりに認められて、マージナルな立場を免れたことへの安心感からであるに違いない。キリスト者は苦しい中で、懸命に信仰の火を絶やさず守り続けているのである。それは私たちが少しだけほっとさせてくれる。

戦時体制下の西南学院については、当時の国民のすべてに言えることであるが、消極的と積極的の二つの側面がある。西南学院は当時の国内情勢の中で脅かされ追い詰められて、不承不承、やむなく翼賛体制に参加したという一面があると同時に、それだけになお一層、積極的に参加を表明し、刻苦勉勵を強調したという一面を否定できないのである。形の上では西南は自主的・主体的に国家に協力し、大勢の卒業生を戦

7 駒込武『御真影奉戴』をめぐるキリスト教系学校の動向』によれば、この時期(1935～39年)に、下関梅光、東北学院、同志社(1935年)、関西学院(36年)、活水、関東学院、西南学院、青山学院(37年)、明治学院、金城、立教(38年)など、キリスト教学校の「御真影奉戴」が相次いでいる。『十五年戦争期の天皇制とキリスト教』富坂キリスト教センター編、新教出版社 2007年、569頁以下参照。

8 『西南学院七十年史』1986年、下巻1379頁。

地に送り出していった。それがあの時代だったのだ、という弁明は、一般的には成立するであろうが、キリスト教倫理の立場からは深刻な問題を残している。どこまでが生存のために許される妥協の範囲であり、どこからがそれを逸脱した積極的迎合であったのか、それを明瞭に述べることは難しい。西南学院は確かに苦しんだ。しかし西南はキリストの前で、「もっと勇敢に告白し、もっと誠実に祈り、もっと喜ばしく信じ、もっと熱烈に愛する」<sup>9</sup>べきではなかっただろうか。

## 2. W.M.ギャロットの来日

以上、太平洋戦争開戦時の西南学院について簡単にたどったのだが、それがどういう状況であったかをもう少し具体的に明らかにするために、この時代を生きた一人の宣教師の生涯をたどってみたい。それは、W.M.ギャロット(William Maxfield Garrott 1910-1974)である。ギャロットは宣教師としてアメリカから日本に来て、そして日本と西南学院のために文字どおり生涯を捧げた人であった。西南学院の創立者であるC.K.ドージャーと並んで、このギャロットは西南学院の歴史の中で特筆すべき人物であったと思われる。

ギャロットは1910年6月20日、米国アーカンソー州ベーツウィルで牧師家庭の長男として生れた。少年時代から学業にすぐれ、「飛び級」を繰り返して15歳でヘンドリクス大学に入学した。とりわけ語学、数学、音楽を愛し、そこに彼の天分もあった。

大学時代のギャロットについて、後に彼自身が物語ったことを、古賀武夫<sup>10</sup>は次のように記している。「先生は音楽が好きでもあり、豊かな才能もあったので、入学早々音楽クラブに入部した。クラブも先生の能力を高く評価したのだが、それは演奏の面だけであって、部員同士のくだけたくつろいだ交わりにおいては、(年少の)先生の存在はけむたくもあり、邪魔であった。夏期休暇の演奏旅行はクラブ最大の行事であり、最も楽しい、破目をはずせる機会でもあった。先生にとっても演奏旅行は初めてのことであり、楽しみにしていた。ところが、先生の参加を正面から拒否する口実が見出し得ない部員たちは、しめし合わせて出発の時間を一時間おそく先生に通知して、先生をおいてきぼりにしてしまった。このことは先生にかなり衝撃であったらしい」<sup>11</sup>。

---

9 ドイツ福音主義教会の「シュトゥットガルト罪責告白 (Stuttgarter Schuldbekenntnis)」(1945年10月19日)の言葉。

10 古賀武夫1904-92。東京帝国大学法科、および同大学院を卒業。日本貯蓄銀行、関東学院教授を経て、戦後、西南学院大学の教授。学長を13年間つとめた。

11 キリスト教学校教育同盟編『日本キリスト教教育史 (人物編)』1977年、394-97頁。

すぐれた知性と堅固な徳性を備えたギャロットは、音楽クラブの仲間からは少々けむたい、融通のきかぬ堅物として見られていた。そこに古賀は、生涯を通じてギャロットを魅力的にしていた少年のような純粹さと、また彼が後に時々経験しなければならなかった人間関係での様々な苦勞の、両方の象徴を見ているのである。

1929年5月、ギャロットはヘンドリクス大学を卒業し、ケンタッキー州レイヴィルの南部バプテスト神学校に入学した。国外宣教師になるのが彼の希望であった。修士課程につづき、ローマ書の研究で博士課程をも修了（Ph. D.）した。聖書のギリシア語原典の研究が専攻であったが、ヘブライ語の成績も優れていたため、博士課程在学中、ヘブライ語の担当教授が海外出張のため1年間不在だったおりに、代講を委嘱されたほどである。1934年5月に博士号を取得した。聖書言語学のロバートソン博士に、母校に留まるように勧められたが、伝道者となるという最初からの決意は変わらなかった。このあたりにもギャロットの純情さが輝いている。世界伝道学主任教授のウィリアム・オーウェン・カーヴァー博士<sup>12</sup>の勧めで、日本への宣教師としての派遣を希望した。

同じ1934年、米国南部バプテスト連盟の外国伝道局により宣教師として日本に派遣され、9月9日に横浜に着いた。横浜港の棧橋でギャロットを出迎えたのは、レイヴィル時代に親友であったE. B. ドージャー夫妻<sup>13</sup>であった。

この当時、日本はすでに日中戦争のさなかにあった。右傾化がすすみ（五・一五事件は1932年）、社会全体が太平洋戦争に向けて傾斜してゆく時代である。ギャロットがそうした日本の状況を知らなかったということはありえない。状況の困難を越えて日



新制大学の初代学長として活躍したギャロット先生

12 William Owen Carver 1868-1954 は、1896年から1943年まで、47年の長きに亘って南部バプテスト神学校の教授をつとめ、米国南部バプテストの伝道神学を指導した。西南学院の創立者 C. K. ドージャー（1879-1933）、その息子 E. B. ドージャー（1908-69）もカーヴァーの弟子である。

13 Edwin Burke Dozier は18歳まで日本で暮したのち、1926年ノースカロライナ州ウェイクフォレスト大学に入学。1929年から32年までレイヴィルの南部バプテスト神学校で学んだ。2歳年下のギャロットは同級生である。1932年に結婚後間もなく来日し、西南学院で英語を教えていた。斎藤剛毅『神と人にと誠と愛を——E. B. ドージャー先生の生涯とその功績——』ヨルダン社 1986年、47頁以下参照。

本に来るだけの理由、宣教師としての強い使命感が彼にはあったと考えるべきであろう。彼は1936年9月までの2年間、東京で日本語研修を受けたのであるが、36年2月に勃発した二・二六事件を彼はどのように見たのだろうか。

東京での2年間は単なる暗い日々ではなかった。この時期にギャロットは熊野清樹<sup>くまの せいこう</sup>牧師 1890-1971 と知り合う。熊野は西南学院高等学部神学科教師を1932年までつとめた後、東京の小石川バプテスト教会の牧師をしていた。お互いにユーモリストであった熊野とギャロットはすぐに親しくなった。ギャロットは当初、小石川教会の執事であった古賀武夫（当時銀行に勤務）の家に寄宿した。音楽の好きだった彼は、尺八を吉田清風について学んだ。

### 3. 西南学院でのギャロット

1936年9月1日、ギャロットは西南学院高等学部（神学科）教師に就任した。彼は直接、牧師養成教育に携わったのである。後年彼はこの時の印象を次のように語っている。「…その後二年間東京で日本語の勉強をして、昭和十一年に西南に赴任致しました。尊敬の的であった波多野培根先生の和服姿を思い出します。藤井泰一郎先生のお宅で開かれた教職員の聖書研究会の雰囲気は心に残ります。河野貞幹、その時すでに白髪となっていた伊藤俊男、中堅として働いていた杉本勝次、坂本重武、大村<sup>おほむら</sup>匡。私の授業はおもに神学科の学生でした。学生はたった二人でした。その二人は今全国的に、また国際的にも活躍している松村秀一と荒瀬昇でした」（西南学院創立50周年記念式典記念講演 1966年5月）。

1937年3月から39年2月まで、ギャロットは小倉の西南女学院理事を兼任した。当時、西南女学院ではルイヴィル時代の恩師カーヴァー博士の次女であるドロシー・カーヴァー（Dorothy Shepard Carver）1909-82（1935年来日）が、1937年から宣教師として教鞭をとっていた。二人はすでにルイヴィル時代に面識があったと思われるが、1938年12月29日に結婚式を挙げた。『西南学院新聞』33号（1939年2月）は以下のように記している。「（西南）学院教師ギャロット氏は先般西南女学院教師ミス・カーバーと婚約なり、昨年十二月二十九日女学院教会に於て結婚式を挙げたが、喜びの氏を訪い感想を尋ねると、感想は色々ありますが、そんな事は誰にでも云える事ではありません……ともかくいいです、と笑って居たが、新夫人はケンタツキー州ルイベル市に生れ、テキサス・ハイスクール卒業後、ユニヴァーサル・リッチマンズで二年間勉学、更に三年のカレッジ生活を終えて昭和十年九月来朝、東京青山女学院で二年間日本語の研究をし、以来西南女学院で教鞭をとって居たもので、吾学院では早々

高等科二年及文科一年の英会話を担当して居るが、朗らかな純日本趣味の人である」。

1939年6月27日、ギャロット夫妻は休暇のため帰米した。結婚の報告も兼ねていたのであろう。「当日教師夫妻は学院関係並びに教会関係其他多数の見送りの中であって終始ニコニコしながら「久し振りに故郷に帰れると思えば嬉しいですが、僅か一年の間とはいえ皆様方に御別れしなければならぬことは淋しいです」と<sup>こもごも</sup>交々語って居た。尚教師は帰米後、バプテスト派の世界総大会にも出席する予定で、休暇中は専ら<sup>もっぱら</sup>神学の研究に没頭する由である」(『西南学院新聞』35号1939年7月)。

この最初の日本滞在は、ギャロットにとって最も幸福な時代だったのかもしれない。語学の才に恵まれた彼は、漢字や仮名をマスターし、日本の新聞を読んだ。日本語で冗談を言えるほどに上達したのである。左利きのギャロットは、黒板に一風変わった筆跡で漢字を書いて、学生を面白がらせた。筆跡はおかしかったが、誤字などは滅多になかった。神学科の学生の数は少なかったが、他科でも聖書や英語の授業をしたと思われ、多くの学生に慕われた。『西南学院新聞』のコラムに次のような記事が見える。

「音楽の話が出た以上は書き漏らすことの出来ぬ事が控えている。先日帰米の途につかれたギャロット教師の尺八である。在留僅か三年なるに日本語の達人なのには驚くし、和辻哲郎教授のあの『風土』という哲学書すら読みこなそうというんだから、日本的なものへの共感と熱情とは我々の想像以上のものである。或時、書生っぽい<sup>かたまり</sup>紺の着物を着用し及んで自転車を猛烈に飛ばす異様な人間を目撃し、それがギャロット教師であったという経験が筆者にある。日本料理は何でもござれ、畳の上に正座することも巧みなもの、こう書いて来ると尺八の趣味何の奇とするところあらんやだが、しかし西洋人と尺八とは一応話題になろうではないか。それが西洋人の耳には淋しくて聴くに堪えられぬといわれる尺八であるだけに、なお我々の興味を牽くのである。我々がフリュートを吹奏して何の奇異の感を抱かぬに、西洋人と尺八を結びつけたとき異様に思えるところに、西欧人に対する日本独特の文化の問題が潜むような気もする。余談はさて置き、来年再びギャロット教師の帰米を迎えた暁は是非技倆の公開をお願いしたいものだ」(『西南学院新聞』35号 コラム「教授室風景」)。

#### 4. 戦争の中で

1年2ヵ月の休暇を終えて1940年9月1日、ギャロット夫妻は再び来日した。しかしこのときには、状況がまったく変わっていた。西南の学生の前で尺八の演奏を披露するどころか、福岡にとどまることもできなかったのである。この年の4月、西南学

院では高等学部神学科が廃止された。当時西南学院には中学部、高等学部（神学科、英文科、高等商業科）、および夜間の商業学校があったのであるが、そのうち神学科が、関東学院高等学部神学科と合併して東京に新たに設立された「日本バプテスト神学校」に統合されたのである。これは、全キリスト教派の国家による統合を前にして、米国北部バプテスト系の東部組合（関東学院系）と南部バプテスト系の西部組合（西南学院系）が教派合同したことに歩調を合わせたものである。

「神学科（現西南神学院）は、別項記事の如く、今回の東西バプテスト両組合の合同に伴い新に設立せられる神学校に合流することとなり、自然、存置の必要がなくなったので、之を来る新学期より廃止し、同時に従来存置せられていた高等商業科の研究科をも廃止し、夫々の定員を高等商業科一年に振向けることとなった」（『西南学院新聞』38号1940年2月）。

ギャロットは日本に来たが、西南学院には彼を迎えるべきポストはなかった。その後の経緯を考えると、西南はこの時ギャロットを見捨てたのだと言われても仕方がないであろう。ギャロットのみならず、E. B. ドージャーなど西南学院に現に着任していた宣教師たちも、次々と西南を離れさせられるのである。ギャロットはやむなく、東京・田園調布に設立されたばかりの「日本バプテスト神学校」に教授として赴任した。しかし、おそらく学生はほとんどいなかったと思われる。田園調布での生活は困難をきわめたが、ギャロットは周囲との融和に努めた。この時期は、彼のユーモリストとしての面目が躍如としている。

「（ギャロット）先生の思い出は数多くあります。……その一つは当時、関東学院の教授であられ戦後福岡の西南に来られた古賀武夫先生から承ったことでございます。略歴にも出ておりますが、戦争がようやく苛烈になった昭和十五年の九月、東西バプテストの合同神学校が東京田園調布に開設せられ、先生はその教授として福岡から東京に赴任せられ田園調布にご家族と共に借家住いをされることになりました。困難を極めた状況下にあっても神学の研究と教育に努められ、配給の行列にも加わって周囲の人々に語りかけ、隣組の集りにも積極的に参加し雑談を通して証しをされていたということであります。配給の行列に並んでおられたときには、あとから来る人に次々に順序を譲って先生は最後になってしまわれ、配給のものはなくなった、そこに落ちている葉っぱを拾って帰られることがたびたびであったと、胸の痛むような話を、私は古賀先生あるいは亡くなった熊野先生から聞いたことがあります」（杉本勝次氏武辞・広報『西南女学院』14号1974年10月）。

1941年2月、宣教師の米国への引き揚げが開始される。4月にはE. B. ドージャー夫妻が母親のC. K. ドージャー夫人モードと共に帰米した<sup>14</sup>。宣教師が次々帰国する

中、ギャロットは、ドロシー夫人と長女エリザベスを米国に帰国させ、一人日本に留まった。この頃には、東京の小石川バプテスト教会の一隅に住み、自炊していた。

1941年12月、日米間に戦争が勃発した後も、日本バプテスト神学校の教授、宣教師として日本に残留することを望んだが、敵国人収容所に強制収容されてしまう。戦後ギャロットはこの当時を振り返って次のように述べている。

「私にとって日本は心から愛する第二の故郷であります。思い出せば昭和九年から数年間国粹主義が高まって困りましたこともあります。戦争になってからは、東京の警察の世話になりましたが拘留生活は愉快的な生活でありました。五ヶ月ほど入りましたが、一人の友人からあんな所に入ってどんな気持なんだと聞かれ、『愉快でした、私は進んで入ったのです』と言ったのです。私はあの時国際情勢をしてどうか戦争にならぬですむようにと祈りながら、とりあえず家内と子供を帰国させました。そして一人残りました。第二の故郷たるこの国に残ることは、神の導きであると信じました。（日本に）残るためには抑留所に入るのも神の心と信じ、神のみ心のある所は到る処が天国であると信じたのであります」（『日本バプテスト』No.4、1948年10月）。

日本に留まろうと努力しつづけたギャロットであったが、1942年6月、日米交換船で米国に帰国させられた。6月5日にはミッドウェー海戦があり、日本は惨敗（空母4、重巡1沈没、航空機322撃墜、兵員死者3,500）して制海権、制空権を失っていた。日本政府は敗戦を隠し、新聞には「敵空母2隻撃沈、敵飛行機120機撃墜」などと虚偽が発表された。ギャロットがもしなおも日本に留まっていたなら、どんなことになっていたか予断を許さない。

帰国時のことをギャロットは次のように語っている。

「然し結局交換船で帰らねばならなかったのですが、第一の交換船でアメリカに帰ってみると、私の上陸は少し面倒でした。



ギャロット先生は尺八を吹き漢字もマスターしていた

14 E. B. ドージャーは米国本土まで戻らず、日本に一番近いハワイにとどまり、ホノルルの教会で日系人の礼拝のために奉仕した。前掲、斎藤剛毅『神と人にと誠と愛を』76頁。

上陸者は一人一人個人的に調べられました。私は、何時間かかかりました。質問の『戦争に対する態度』への私の答えは『私は戦争に参加できません』というのであったからであります。『敵を愛せよと、言うのは私の信条であります。私には銃を執ることが出来ません。或は人によっては出来ても、私にはできません』と言ったのです。ようやく上陸出来ました」（『日本バプテスト』No. 4、1948年10月）。

辛うじて日本を脱出したギャロットであったが、日本と日本人を愛する彼にとって、戦中の生活は悲しみの多いものであった。

「昭和17年米国にスウェーデン船グリプトン号で悲哀の中で送還され、アーカンソー州の日本人のキャンプで奉仕される身分になりました。南部バプテストの恒例の海外伝道の集まりが、リッチクレストでありました。ギャロット先生が一人の宣教師としてメッセージをするように指名されました。2～3千人の観衆の前でしょうか、先生は登壇するや、口を開きましたが、涙のために声が出ません。じっと我慢して、もう一回声を出そうとなさいました。しかし嗚咽して声になりません。しばらくして、もう一回声を出そうとなさいましたけれども、どうしてもこみあげてくる涙で声が出なかったのであります。敵国の日本に宣教師として働いた人として、先生はそこに立ったのです。アメリカの人には、軍国主義日本の銃剣の前に死んで行くアジアの無辜の幼児や婦人達のことを思い、怒りがありました。その日本に対する厳しい眼差しの前に立って、言葉がなかったのです。そのあと食事のときに、或る人が、どうしてあの宣教師は、子供のように泣いて、一言もメッセージを話さなかったのかしらと話している人がございました。当時、米国南部バプテスト連盟外国伝道局の総主事であるランキン博士がそこに居合わせて、『日本を愛しているもののみ知る心の苦しみ、身代りの愛の悩みです』と説明されたそうです。愛する西南、愛する日本、愛するクリスト者よ、なぜ、なぜですか。苦渋に満ちた愛する者のみ知る、苦しみでした」（松村秀一追悼辞「戦える天使」、ランキン・チャペルでのギャロットの西南学院葬1974年7月7日）。

## 5. 戦後のギャロットと西南学院

戦争がもっとも傷つけるのは、善良な人々、「心の清い人々」（マタイ 5：8）である。敵を憎悪する人々は、どんなに多くの無辜の人々が殺されても傷つかない。彼らの憎悪は憎悪を連鎖的に生み出し、平和を作り出すことは決してない。戦争の悲惨を乗り越えて平和を回復する人々とは、戦争でもっとも傷つけられる「心の清い人々」である。

ギャロットはまさにそのような人として、戦中を涙の内に過ごした。戦争が終って、彼は再び西南学院で働くようになった。そして西南学院の歴史の中でおそらくもっとも慕われた院長として、その生涯を終えることになった。彼の後半生については、この稿の担当すべき範囲を逸脱しているので、ごく簡単に年表の形で紹介したい。彼は西南学院と西南女学院の両方で院長職をつとめ、両校の歴史の中に消えない印象を残した。

- 1947年10月 西南学院専門学校教授として帰任。西南女学院理事長に就任（-1952）。
- 1948年12月 西南学院院長（-1952）、西南学院専門学校長事務取り扱い併任。
- 1949年4月 新制西南学院大学発足。教授（-1964）、学長（-1952）。
- 1952年9月 休暇帰米。ルイヴィルの母校で客員教授。
- 1953年9月 再来日して、西南学院宗教主任。
- 1958年9月 休暇帰米。ルイヴィルの恩師カーヴァー博士を記念する Carver School of Missions and Social Work にて客員教授。
- 1959年10月 再来日して、西南学院宗教部長。
- 1960年10月 西南学院院長代理併任。
- 1961年10月 西南女学院理事長就任。
- 1962年3月 西南女学院院長就任（-1972）。小倉に転居（-1972）。
- 4月 西南女学院短期大学学長兼任（-1966）。
- 1968年4月 西南女学院中学校長兼任（-1969）。
- 1972年4月 西南学院大学神学部教授就任（-1974）。
- 9月 西南学院理事長。
- 1973年4月 西南学院院長・宗教局長兼任（-1974）。
- 12月 心臓発作のため2ヵ月入院。

「(ギャロット)先生はかねて、心臓に故障があると聞いていたが、昨年12月末心臓の発作のため入院された。3月からは元気に出勤されたが、5月には定期帰国制で4ヵ月間、帰米されることになっていた。5月11日の創立記念式は従来全学院で行っていたが、本年は各校別でやることになった。第一回は中学で、院長は元気な声で式辞を述べられた。終って、私と先生は高校の式場まで歩いた。わずかに300メートルの距離であるが、先生の足は遅れがちで、とうとう、『私はゆっくり歩くから、あなたは先に行ってください』と言われた。私は先生をせかせてはかえって悪いと思い、ひとり道を急いだ。50メートルぐらい歩いてから、念のため、ふりかえって見ると、先

生はじっと立ち止まっておられた。私は驚いて戻った。しかし、先生は『いや、いつものことで、別に心配はいりません』と言われた。私は、先生によく接していたが、多くは室内、会議の席であって、これほどまでに歩行に困難されるとは全然知らず、これは容易ならぬことであると思った。しかし、先生は高校でも、大学でも、大きな声をあげて式辞を述べられた。そして、すぐに板付空港に向われた。そして、その日のうちにシカゴに着くと言っておられた。強行軍であった」（坂本重武「ギャロット先生をしのんで」『キリスト教学校教育』177号1974年7月）。

1974年5月 定期休暇帰国制で、4ヵ月の予定で帰米。

6月26日 ノースカロライナ州ウINSTONセーラムのボウマン・グレイ・バプテスト病院で心臓手術を受けるが、術後2時間で急逝。享年64歳。

「西南学院のウィリアム・M・ギャロット院長が26日、帰郷中のアメリカでなくなった。同学院で教べんをとること30数年、旧制の学院高等学部を大学に昇格させ、さらに短大、高、中、幼稚園、保育園まで約1万人の総合学園に発展させた功労者だった。180センチ近い長身にがっしりした体。自慢のあごひげが最近はずっかり白くなっていた。それでも学生が大好き。本部2階の院長室は、いつもドアがあきっ放し。『どうぞ、いつでも、だれでも、訪ねてきてください』が、口ぐせだった。

20年ほど前、卒業式のとき、いきなり演壇の上に飛びあがった。『諸君、ボクを覚えておいてほしい』。足が不自由だったが、気にすることもなかった。学生主催の体育祭で走ったこともある。暇を見つけて学内を回り、よく学生と議論した。学生運動活動家とも気軽に。事務職員が心配した。

教べんは主に神学部でとった。牧師の卵が相手で、授業はきびしかった。が、ふだんはユーモアと音楽を愛した。戦後の混乱期、大学昇格のための事務で、職員が夜遅くまで仕事をしていると、ドロッシェ夫人（西南学院大講師・英語）が、コーヒーをみなにサービスしていた話は、いまでも学院の語り草だ。

昨年暮れ一度、狭心症で倒れた。そして5月11日から4ヵ月間、休暇と宣教団本部への報告を兼ねて帰郷。数日前、心臓手術を受ける、との知らせがあった。手術は成功したという。が、体力がもたなかったらしい。26日昼、悲しい知らせを聞いた教職員たちはつぶやいた。『何とか福岡に帰りたいと、無理して手術を受けられたに違いない』。九日付で、学院あてに発送された航空便が最後のことばになった。左ききの手で書かれた日本語の手紙だった。『蒔かれた種がこれから学生の間、教職員の間、に実を結ぶよう、祈っております』（『朝日新聞』1974年6月27日）。

1974年7月7日 西南学院による学院葬。

9月22日 ギャロットの遺骨を迎えて、西南女学院による追悼式。同敷地内の「西南の森」に遺骨を埋葬した。

西南女学院では、ギャロットの書いた「要」という文字（「西南」の西と「女学院」の女という文字の組み合わせ文字）を学院の象徴の一つとしている。西南学院では、ギャロットの院長時代に始まった英語弁論大会が「ギャロット杯」と名づけられ、現在も続けられている。